

みちのく

少年編

—第41号—



令和元年度刊
仙台矯正管区

み
ち
の
く

少
年
編

第
四
十
一
号

仙
台
矯
正
管
区

刊行のことば

本誌は、昭和五十五年の創刊号以来毎年刊行し、本号で四十一号を数えております。

当管区では、今年度から従来の「東北ブロック書画コンクール」に文芸部門を加えて「みちのく書画文芸コンクール」を開催することとしました。本誌には、同コンクールに応募した、当管区管内少年院の在院者の書画作品及び文芸作品のうち、各分野で御活躍の先生方の審査により入賞した作品を掲載いたしましたので、ご覧ください。

令和二年三月

表紙の題字は久道石静氏の揮毫によるものです。

編集後記

本年度から、みちのく書画文芸コンクールとして書画作品及び文芸作品の応募を募りましたところ、各施設からこれまでと変わりなく多数の作品が寄せられ、本書画文芸作品集の発刊の運びとなりました。

文芸作品については、御審査を賜りました先生方の多大なるご協力のもと、本年度から新たに、各分野において金賞、銀賞、銅賞及び佳作作品を選定することが叶いました。

紙面の都合上、一部しか掲載することができないことが残念です。

末筆になりましたが、本誌の刊行に当たり、御審査と御指導を賜りました先生方に、誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

「みちのく」少年編第41号
令和2年3月発行

編集発行 仙台矯正管区第三部
〒984-0825 仙台市若林区古城3-23-1
TEL 022-286-0178

目次

【文芸部門入賞作品】

作文・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

【選評】川田永子先生

詩苑・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

【選評】原田勇男先生

歌壇・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

【選評】伊藤久子先生

俳壇・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

【選評】鈴木三山先生

柳壇・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

【選評】佐藤岩男先生

【書画部門入賞作品】

絵画・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

【選評】吉田利弘先生

ポスター・カレンダー・・・・・・・・ 35

【選評】鈴木智枝先生

書（毛筆）・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

【選評】村山柳雅先生

書（硬筆）・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

【選評】村山柳雅先生

書画部門審査総評・・・・・・・・・・ 44

《作文》

金賞

「輪」〜暗闇と光〜

青葉女子学園 ボブ

『一人さみしい。一人苦しい。一人悲しい。一人辛い。一人。ずっと二人。暗闇の中をただ歩く。どん底で、だれも救い上げてくれない。転んで、泣いて、また歩いて、泣いて。先の見えない道をずっと。けど、暗闇にほんの少しの光。まだ完璧な光じゃない。その中でびる二つの手をつかんだ。顔を上げるとみんな手をつないでいる。よく見ると『輪』だ。けっして大きくはないけど『輪』だった。一人じゃなかった。一人じゃなくて強くなれる。一人じゃなくて温かくなれる。一人じゃないってうれしい。一人じゃなくて救われる。一人じゃなくて笑顔になれる。ゴールはわからない。でも光に照らされた道を今日も歩きつづける。』

これは、私が学園祭で創作した詩だ。学園祭のテーマは「輪」だった。

いろんな子を見てきた。親が死んだ子、愛情が足りない中で育った子、非行に走った子、親に育てられた子、自傷をくり返す子。暗闇の中にいる子をたくさん。自分自身も、その中の一人。すでにしかれたレールの道を歩く。だれがそのレールをしいている？親？非行仲間？・・・他人？・・・

自分自身？そう、自分自身だ。だれかのせいにするれば、楽って思えるかもしれない。私は悪くないと思いたいのかもしれない。

「親なんて子供の事見てないもん。」「親に期待するだけバカ見ると学んだし。」「家にいたくないもん。」「あいつら（家族）と一緒にいるより、だったら、非行仲間といた方がいい。」「生きるの面倒だから死にたい。」「こんな人生つまらない。」「ウザイ。」「死ねばいいのに。」「・・・そうやって、どんどん暗闇に、さらに黒いモノをたして、黒くなっていく。逆の世界にいる子たちはどんな気持ちでいるのかな・・・。」

児童相談所、養護施設、鑑別所、薬物者のアジト、少年院。いろんな所をきた私は、逆の世界の子たちの考えがあまりわからない。

自分がわからなくて、自傷をくり返し、泣いては、だれかのせいにしてきた。私が最後行きついたのは、少年院だった。親の再婚を理由にすづけ、母親の仕事という道に文句をつけ、血のつながりのない父親に、反発し、ただ辛かった。

少年院に向かう車の中で、私は、暗闇のゴールに近づいた。そう思った・・・けど、出会ったのは、私の暗闇に光を照らしてくれる先生と、私と同様に、先生たちから光をもらっている生徒達だった。

入所当時、最悪・・・と思う中ではじまったのは日課説明と、覚えきれない程のルール。次々にはじまり、次々におわり、つかれている中で、出てきた夕食は、肉じゃが・・・。

「少年院っば・・・最悪。」

夜、ねる前、フツと思った。 // 私の暗闇のゴールっていつ？”

「もうー、いなくなりたいよ・・・。」

親友を思い浮かべ、私は涙を流した。暗闇をさらに黒いモノがつつんだ。

そんな中、一番にさしこんだ光は多分「担任の先生」の存在だった。アンケートの説明をされただけだと思う。けど、担任の先生の存在は、この作文を書いている今も、人一倍大きい。ぶつかる事もある。(二方的に)それでも、担任の先生が好きだ。

次に光を感じたのは、調査生活がおわり、集団寮にうつった時だった。あたふたする私に、だれ一人、何も言わなかった。そう、光をくれたのは寮生から。光で照らしてくれているというよりは、自分たちが職員から受けている光をかみに反射させて、わけてくれる様な感じ。感じた光はうつすらだったけど、でも、私にとっては大きかった。まぶしい位の光を感じたのは学園祭だった。スポットライト・・・ではなく。

・・・私は、この先、だから、どんな事から光をもらっても、光だけにつつまれた真っ白な世界を歩く事は無い。体の一部に残るキズや、心の中に残ったキズは、跡、一つ無しに消える事は無いだろうから。

暗闇だと感じていた少年院は、私に手を差し伸べてくれた。そして、詩に出てきた「その中でびる二つの手をつかんだ」の所・・・私がつかんだ手は、文句をつけたり反発をしつづけた両親の手だった。「輪」の一部になった私自身も、また、

だれかの手を引き、だれかを照らすのだろうか……
そう思った時、あの詩が生まれた。



暗い人生

東北少年院 H・R

僕は社会当時、大人が大嫌いでした。幼い頃父に暴力を受け、そんな環境からか、暗く、無口で大人しい自分が生まれました。小・中ではイジメられ、それに反抗するわけでもなく、ただただ無視を続けていました。今振り返ってみると、陰気だったなと思います。家庭環境はとも複雑で説明するにも一苦労です。周りの大人たちからは同情され、痛い目で見られ、しまいには近寄らなくなります。それが何よりも許せませんでした。大人とは勝手な生き者、都合がよくて自分勝手で人の気持ちを持って遊ぶような存在だと思っていました。そんな中でも感情を表に出さず、我慢することの良い子でいようとしていました。思ってもないことを口にできたり、顔色をうかがって様子を見たりと、幼き頃からずつとそうしてきました。色々な大人からは、「大人しいね。」とか、「えらいね。」なんて言葉をよく掛けられました。もちろん、僕の味方をしてくれた大人もいましたし、事情を知っている上で何かしてくれる大人達もいました。そんな人達まで嫌がっていたわけではありません。むしろ甘えん坊である僕にとつてとても嬉しいことでした。なので、全ての人を嫌っていたということではありません。そして、まるでロボットかのように小学校へは行っていました。その日その

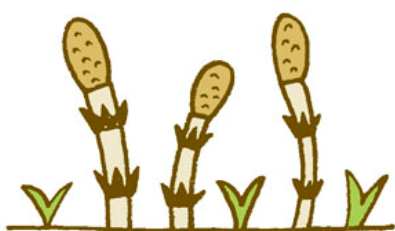
日を過ごし将来の夢はなく、とにかく現状しか見つけていませんでした。中学もそうです。自分に価値なんて何にもないと思っていましたし、自分のことが大嫌いでした。だから、何にも楽しくありませんでした。本当は、寂しがり屋で甘えん坊なのに何もかも「我慢」をしてきました。喜怒哀楽の感情さえもです。良い子を演じていなければいけないと思っていましたし、さからってはいけない、ずつと周りを警戒しながら生きてきました。それが僕にとつて普通なことだったのです。素の自分を出すことが怖く、嫌われないかな、怒つたらどうしようということを考えてばかりいて、心を頑なに閉ざし、人と接していません。だからからか、上辺だけの友達しかできなく、親友と呼べる友達がいません。とにかく、自分の人生自体つまらないと思っていました。そこで不良交友と出会いました。興味本位でタバコや飲酒をし始めると、悪い事を一緒にしたというドキドキだったりハラハラだったりから、秘密を共有したような親密感を覚え、楽しいと感じました。それから犯罪にまで手を染め出し、それまで封印されていた何か解き放たれたような感覚に陥り、戻ろうにも戻れない位置までに行ってしまったのです。とにかく楽しくて、つまらないと感じていた人生が悪さをすることで楽しいものとなり、自分から求めていくようになりました。不良交友も、自分の事を認めてくれるし、自分の事を受け入れてくれて、その時の僕にとつての居場所は不良交友そのものでした。自分が強くなれたような気がしましたし、これでいいやと現状に満足して

しまっていました。犯罪をするようになって、世間から「不良」と呼ばれる頃、自分の中のものが変わっていくのが分かりました。今まで真面目に生きてきたことを否定するようにもなりました。嫌いな大人に歯向かい敵意まる出しで、殴り合いの喧嘩は日常茶飯事で本当にメチャクチャでした。それでも何の疑問も持たず目の前にあることしか見れていなく、どんどんエスカレートしていきました。補導される度に悪態をついて、家族から何か言われても反抗するようにまでなっていき、もはや聞く耳なんて持っていないませんでした。「どうせ自分なんて。」と思っていましたし、「別にどうだっていい。」とも思っていました。なので自分がやっている事に対して何の疑問もなく、人の気持ちを考えるわけでもなく、自分の心の内に秘めた凶暴性を全面に出しました。そこしか居場所がなかったのです。自分の事を悪く言う人は敵で、肯定してくれる人が味方というのが当時の考え方でした。ですが、そんな生活も長くは続きません。何回も逮捕されましたが、反省する気になれず元の生活に戻ってしまうばかりでした。当然逮捕されれば様々な大人と出会います。時には面接したりもします。自分の気持ちを一切話さず、嘘やキレイ言を並べるばかり。「うざい」、「うっとうしい」、「うるさい」と思うばかりでした。そして、とうとう少年院へ来ることになりました。大人しくて、とても悪い事をしてきたように思えない、とこれまで何人もの大人の人達に言われました。ただ、感情を出さないので冷酷な人に見えたかも分かりません。本当の気持ちを話すことなんて絶対でき

ないと思っていましたし、嫌だと思っていました。もちろん、東北少年院へ来て最初から変わろうと思っていました。何度も失敗していたので。入院当初は、何よりもネガティブでした。大人に対しても苦手でしたし、自分から話し掛けることもありませんでした。言われたら淡々とこなしていくというような存在でした。表情も固く、何を考えているのか分からなかったと思います。僕の場合、様々な事、例えば悩みとか不満とか本心とか、そういういたもの全てを自分で抱え込んでしまいます。感情面についても同じです。我慢することが基本のスタンスでした。実際それで生きてきましたし、それが普通なことです。いわば、人を頼ることができないのです。そもそも信用することができませんでした。それで思っていることを口にできないまま、ずっとモヤモヤしたり引きずって一日中イライラしていることが日常のようにありました。その上に、個別担任の先生が厳しく、苦手意識をもつようになりまして。それでも、反抗しちやいけないうし避けることもできません。自分の考えを全否定され、課題を出され、自分と向き合うことが嫌いだっただ僕に様々な問題解決の為に指導や助言をされてきました。辛く苦しく、嫌で仕方ありませんでした。投げ出したくなることも、やさぐれたくなる時もあった程です。とにかく苦しくてイライラばかりしていた覚えがあります。個別担任の先生には、絶対心なんて開けない、開かないと思っていました。それでもがんばれたのは、今まででかした事の罪悪感だったり、本気で変わりたいとい

う意欲だったりです。色々な大人の人と出会いました。色々な人との面接の中で僕の大人に対する価値観は大きく変わっていきましました。厳しく言うてくれる本当の意味というのも分かりました。今まで大人はこうだと決めつけていた僕が、子供だなどと思えるようになりました。尊敬に値する人達ばかりだなと思えました。そして、自分の事を正しい道へ導いてくれました。苦しいからこそ人は成長できると思っています。僕は今になって思いますが、ここへ来て良かったと思えています。夢や希望もなかった僕は、とんでもないことをしでかしていたかもしれない。楽しく明るい未来にしてくれたのは、間違いなく先生方です。夢や理想を持つようになってから、ポジティブに考えられるようになりまししたし意欲が湧き、未来の為、自分の為ががんばろうと思えるようになり、自分のことを少し好きになり自信を持てるようになりました。自然と明るくなりましたし、かなり前向きになることができました。人を頼ることができなかつたのに、自分から積極的に相談をしたり元気に人と接するようにもなりました。担任の先生に心を開けないと思っていたことが、ふと気付いた時にはいつの間にか心を許していて、とても信頼し大好きだったことに気が付きました。必ずしも褒めてくれる人だけが良い人ではないし、厳しいことばかり言うからといって嫌われているわけではないのだなと今の歳になって分かりました。とても変わった部分は大きいと思います。でも、辛く苦しいものでした。僕が学んだことは、辛いことの先にきつと何かあるということと、今やっ

ていることが必要なことなのか要らないことなのかは後になってみないと分からないということ。きつと無駄なことなんてないし、かといって必要なことばかりでもない気がします。今までの人生は、暗く誰から見ても同情されるような人生だったかもしれないが、それもまた必然です。自分の運命なんです。だったら、毎日を楽しく気楽に生きていた方が断然良いです。考え方次第でどうにでもなりますし、変わります。これまで暗かった分、これからは正反対の明るい人間となり、人に明かりを灯せるような人になりたいと思っています。辛くてもその状況をどう楽しむかで変わってくるはず。ユーモアで面白い人間になる為にも、できることを精一杯やってこれからもポジティブでいたいと思います。元気が一番！



「セロひきのゴーシュ」を読んで

盛岡少年院 S・R

私がこの本を読もうとしたきっかけは、タイトルを見た時に「セロひきのゴーシュ」という題名を見てもイメージが湧かなかったので、逆に興味を持ったことと、この少年院で浸透している宮澤賢治の作品だったので読んでみようと思ったのがきっかけで読み始めました。

この本は、セロを弾くゴーシュが主人公の話です。ゴーシュは、町の活動写真館の楽団である金星音楽団でセロを演奏する係で、楽団では近くの町の音楽会で演奏予定の第六交響曲の練習を続けていました。しかし、ゴーシュはセロを弾くのがあまりにも下手だったので、いつも楽長にいられていました。そんなゴーシュのもとに様々な動物たちが夜毎に家を訪れ、いろいろと理由をつけてゴーシュに演奏を依頼しました。そうした経験をした後に行われた音楽会本番では、第六交響曲の演奏は成功します。そして、その後に司会者がアンコールをお願いすると楽長はゴーシュを指名したのです。ゴーシュは指名された時、バカにされたら腹を立てますが、その中でもゴーシュは動物たちの訪問を思い出しつつ、インドの虎狩りという曲を夢中で演奏しました。その演奏が、楽長をはじめとする楽団員みんなから賞賛されることになったというのがあらずじです。

ゴーシュは技術はありますが、丁寧ではなく短気なところがあるため楽長に叱られます。そして、その憂き晴らしに生意気な猫をいじめるなど卑屈な若者として描かれています。動物たちへの無償の行為を通じて次第に謙虚さと慈悲の心がめばえ、それによって真に音楽を理解できる青年へと成長していったと思います。

はじめに楽長はゴーシュに対して、リズムが悪い、音程が合っていない、感情が出ていないという指摘をしました。その指摘を受けたゴーシュは猫に対して反発し、感情をぶつけることとなりました。私としては三毛猫がかわいそうだと思います。私としてはここで知らず知らずのうちに、重要な曲の選択と予行練習を行ったと私は思いました。さらにカッコーとの反復練習で自らの音程の狂いを自覚しました。私はカッコーに対してゴーシュは悪いことをしたなと思いましたが、もしかしたらゴーシュは自分のありのままの技術に向き合えなかったのかも知れません。また、タヌキの鋭い指摘によって自分の楽器の特性を知りました。私だったら何でタヌキに教えられなければいけないのかと頭に来る反面、イライラしながらもありがたさを感じると思います。また、ねずみの母親からゴーシュが人知れず役に立っていることを教えられて、自信を持ったんじゃないかと思いました。やはり人から必要とされることは私もそうですが、力になるし、うれしいことだと思います。私は、リズム、音程、感情の三つが改善された結果、ゴーシュの演奏が聴く人の心を動かしたのではないかなと思います。ゴーシュは楽長からほめられては

じめて自分の上達を知り、動物たちから助けられたことに気付いたと思います。

私は、この本を読んで学んだこととして、まずは人をひきつけるということを学びました。私は今、溶接科の実習と体育に一生懸命取り組んでいて、日々の努力が大切だと感じています。そして、よりレベルを高めていくには、もっと人の話を聞き、正確に行動していきたいと思っています。また、何かをできるようにになりたいと本気で取り組む姿勢は人の心を動かすんじゃないかと思っています。私は将来、とび職人になるという目標を持ってるので目標を達成するためにも人一倍の努力をして、少年院生活での自分のやるべきこと一つ一つに集中し、面倒くさがらずに積極的に取り組んで一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。最後に、宮澤賢治という人は人の幸せを願い、行動した人だと思います。私も、少しでも人の役に立つような行動ができる人になっていきたいと思っています。



「雪渡り」を読んで

盛岡少年院 K・K

宮澤賢治さんの作品は、とてもユニークで難しい言い方で表されています。私がこの作品を選んだ理由は、自分の中にも似たようなところがあると思ったからです。

この作品は、きつねが人間の男の子と女の子の兄妹と交流して、人間がきつねに対して抱いてしまっている誤解を解こうとする話です。

村の人々の間で、きつねにだまされて悪い物を食べさせられた、という人がいて、きつねをこらしめるために、わなを作ったりしていました。ある日、兄妹が散歩をしているときつねに出会います。最初は警戒していたのですが、話していく内に楽しくなり、きつねのパーティーに誘われましました。後日パーティーに行ってみると、スライドショーのようなものを見せられます。それは、悪い物を食べている大人の人の写真でした。悪い物を食べた人はお酒を飲んでいて、きつねが化かしたのではなく、酔って勝手にそこらに落ちていたものを食べてしまっただけでした。しかしその人は、きつねに食べさせられた、ときつねのせいにしたのです。その人間は、やり返してやる、と言わんばかりにきつねをわなにはめたりして、ひどい事をしました。ですが、きつねは怒る事もやり返す事もせず、二人の兄妹に誤解だと分かっても

らおうとしたのです。きつねは二人に信じてもらえるように、ちゃんとした食べ物を出します。二人は一瞬ためらったのですが、きつねを信じそれを食べました。それはとてもおいしく、きつねも二人も喜び合います。

私はきつね達の思いに感動しました。どんなことをされても「それは誤解だ」と怒らずに真実を分かっただけならおうとする誠実さがあるからです。きつね達のなかに、信じさせる何かを感じたのかもしれないし、この兄妹だったから信じたのかもしれない。ですが私は、この作品を通して、人を信じる事、信じてもらう事の大切さを学べたように思います。人を信じるのも信じてもらうのもそう簡単な事ではなく、逆に失うものはとても簡単なものであると思いました。まさしく、今までの私がそうだったように、どんなに頑張っ得た信用もほんの一瞬で失ってしまい、好き勝手すぎて私の周りに人は近づかず、憎まれたりするようにになりました。

一方で、私は、きつねのせいにした大人の気持ちも分かるような気がしました。なぜなら、私も似たような事をしてしまっていたからです。つまり、自分がこんなにだめなのは全て周りのせいだと言いつつ、自分が恥をかくことのないようにしていました。実際そんな事をしている事が恥ずかしいことであり、心の中では自分が悪いのを知っています。まさしく前の私はそういう大人の悪いところだけをもった最低の人間でした。

私は最近、相手の思いをよく考えるようになり

ました。傷つけてしまったのではないか、私のせいで今辛い思いをしているのではないか、勝手な想像でしかありませんが、考えれば考えるだけ良くない事ばかり浮かび、胸が締めつけられるような思いになります。

この作品の最後にきつね達は、自分達を信じてくれてありがとう、と二人にお礼を言います。私はそれまでのきつねの思いを考えました。きつねは自分達のせいにされ、苦しみ傷つき、どんなに辛くても人を憎まず、一生懸命に説明し、自分達なりに頑張って勇気を振り絞ったのではないかと思えました。きつねの純粹な思いを考えると本当に胸が締めつけられるような気持ちになります。きつねと、こんな思いは相手の気持ちを考えられるようになった今だからこそ、そう思えるのかもしれません。

前の私にはきつねとこんな考えは出なかったと思います。少年院生活を通して、他人を見下したり、人は利用するものだ、という考えではなくなりました。大概のことは笑って流せるようになり、人を敬う事が出来るようになりました。

この物語の最後は、きつねの生徒達が、キラキラ涙をこぼしながら、兄妹にいてねいにおじぎをして終わります。私もそのような気持ちで社会に戻りたいと思っています。

大人達へ「ごめんなさい」

東北少年院 E・M

僕は今まで関わってきた何百人と言う多くの大人達に一人でも多く「ごめんなさい」を伝えたい。と心から強く思っています。

僕はある出来事をきっかけに大人に対しての不信感を強く持つようになりました。

その出来事と言うのは、僕は義父から激しい虐待を受け続けてきました。そんな時自分にとっての逃げ道は「学校」でした。学校に居る間だけ平常心を保つことが出来ていたのです。それは友達や学校の先生が居てくれたから。そんなある日、学校の先生から〇〇家に口を出したり関わると親父が出てくるぞ、と言われ先生から辛い言葉を受けました。暴力で作った痣や瘤は数日経てば消えますが、その言葉は一生消えません。何より信頼した先生達からの激しい視線。友達は多く居て部活も男子バスケットボール部に所属していた。けど学校は、やはり先生が支配する所。頼りにしていた先生に裏切られ唯一の逃げ道の学校にも居場所が無くなったように感じ、それから大人に対して不信感を持つようになりました。高校に入学しても先生と上手に良い関係を築けず、不信感を持ってしまった自分は、もう一人の自分が変わっていききました。最終的には警察や友人の親や、バイトの上司や児童相談所に助けを求めましたが、頼り

の警察にでさえ助けてもらえず、そこから、もつと不信感は強まり自分の隣に大人がいることが精神的苦痛になってしまい、高校を辞めると同時に大人を避けるようになりました。勿論大人を避ける前に自分で工夫したことがあります。もし大人の言う「良い子」になればと思っただけで行動してみたり、逆に悪い事をしたらと思っただけで行動してみても1mmも褒めず怒らず寧ろ「親父が出てくるから」と離れていきました。学校の先生が急に変わってしまうし、友達を頼ろうかと思いましたが、迷惑を掛けたくないと言う一心から、友達と居る時はなるべく悟られないよう振る舞ってきました。

ですが我慢も不信感もそう長く続かず「学校」「友達」「実家」を離れ一人になってしまいました。一人になったことで居場所を求め続ければ寄ってくるのは不良達でした。

不良なら自分を受け入れてくれると思っただけです。今思うと、そんな自分を利用していただんだと思っただけです。そんな生活をするうちに、自分の地域だけに限らず幅広い範囲で有名になってしまいました。そうすればいろんな犯罪にも手を付けてしまい「悪い事をしている」と言う実感はありませんでした。犯罪に手を付ければ付ける程捕まる率は高くなり数えられない程警察にお世話になりました。と言っても相手は警察であろうと大嫌いな大人です。当然当たり散らし毎度困らせてしまいました。そうやって自分は色んな犯罪に手を付けてきたから、今自分はこの東北少年院に来ることとなったのです。

少年院に来た当初は父を憎み恨みました。「そも

そも本当の父親でないのに、どうしてこうなるの。全てあの男のせいだ。」と思っていました。当然少年院の先生と目を合わせず話すことさえ拒みました。最初は先生達が大嫌いだっただし、それは何ヶ月経っても変わりませんでした。それは「どうせ少年院の大人も社会の大人と同じだ。」と思っただけからです。

僕は最初「一年なんかやり通せばいいや」と考えて少年院の規律にそんな抵抗はありませんでした。結果何度も規律違反を起こし、処分を受け在院期間も延ばしてしまいました。そんな時は「一ヶ月二ヶ月変わんねえよ。」と思っただけ反省の色もありませんでした。しかし今ではその失敗をすごく後悔しています。

そして、私がたくさんの大人に「ごめんなさい」を伝えたい理由は、少年院の先生がきっかけです。僕はもし、ここに来ていなければ何も変われなかったし、大人に対しての不信感も続き、まともな仕事にも就けずの人生だったかと、今考えるとものすごく恐ろしいです。

自分は、ここでの規律違反を含め反抗や暴言をたくさんしてきました。けど先生方は見放さず正面から自分と向き合ってくれて下さる上、怒る時は怒るし褒める時は褒めてくれて、辛い時悲しい時楽しい時どんな時も相談に乗ってくれてくれる上に、しっかりと自分を見てくれる。そう生活する内にこの大人だけは違うと思うようになり、先生達に少しずつ心を開けるようになり、目を合わせて話すことが出来ました。ですが自分が感情的になっ

「結局大人はこうなんだ。」と先生に強く言ってしまうのです。今までの不信感から先生達をどうしても今まで関わってきた大人達の部類に入れてしまい、本当は違うと分かっているでもそう言う感情から発してしまう。時に自分から逃げることもありましたが、ですが何があるかと先生方は、自分から離れず冷静になるまで待っていてくれました。それは少しでも今の自分を自覚し変わりたいと言う気持ちがあったから、先生方は支えてくださってたんだと思います。

僕は少年院に来て半年経ってから、やっとやる気になり変わりたいと思いました。その時から「大人は全員が全員見放す人では無いんだ。いつか自分も大人になる日が来る。」そう思うようになりました。そう考えると幅広い範囲での大人達の中にも絶対良い人は居たなと思っています。何もかも大人を先入観から避けてきました。自分を大事に心配に思ってくれていた人達も数多く居たはずです。そんな人達を自分は離れ捨ててしまったことに気づくことが出来て、不信感も少し和らいできました。自分も大人によって傷付きましたが、逆に自分も少数の大人を傷付けてしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

そしてもし先生方と出会わなければ、悶々とした人生で大人になっても大人を避けていたと思います。そのどん底から手を差し伸べてくれる先生方にとっても感謝はしています。ですがやっぱりどこかで「先生達は仕事だからだ。」や社会で会ったら社会の大人と同じだったのかなと少しの部分で不信感はあるし、不信感を一生消すことは難し

いと思います。信じて良い人、駄目な人、自分を中心に思ってくれている人、そうでない人の区別は出来るようになりました。又、全員が全員良い人とは限りません。もしかしたらまだ信頼している大人に裏切られるかもしれませんが、でも、もう自分は咎めません。

今自分が考えている限り、そう言う大人にはならず「夢」に向って全力でがんばり自分が傷付いた大人のようにならないと決めています。

そして、不信感から、少年院の先生に当たり散らし、反抗、暴言、不貞腐ったり、無視したり、と色んな面で迷惑を掛けてしまったことに本当に「ごめんなさい。」

警察の方には、「子供が辛く苦しい時に助けなかつたくせして子供を逮捕はするのか。警察は何考えてんだよ。」とどなり散らしてしまい本当に「ごめんなさい。」

児童相談所の方々には、他の子供が何人もいる中で自分は一週間と言う期間を何も口開かず大人は出てけ、と言ってしまい「ごめんなさい。」

職場の親方や社長、副社長さん達は自分の心を少しでも和らげようと、ご飯や色んな所に行こうと誘ってくれていたのに、ずっと断わり続けてしまい「ごめんなさい。」

そして、母さん。父さんからの暴力を、共に何年も受け、傷付いたのに自分は「母さんが助けてくれなかったからこうなった。」と母さんを責めてしまいました。本当は父さんのせいなのに、母さんは「ごめんね」「ごめんね」と言っていたのに、変わりはてて行く自分の姿、その上に少年院まで

来てしまい本当に「ごめんなさい。」

最後に大人を含め、友人、恋人に自分一人のせいで振り回し悪影響を与え「ごめんなさい。」

僕は今この東北少年院に来て良かったと思っています。そして大人に対しての価値観や不信感を基に、社会で大人に不信感を抱いているたくさんの子供達を助けてあげたいし、子供を含め周りの大人から信頼される立派な大人になり、これからの人生でこの一年弱の期間を忘れません。

そして自分がまず、大人を信用し大人から信用される自分作りをしようと思っています。本当に「ごめんなさい。」そして「ありがとう。」



大嫌いだった誕生日

青葉女子学園 M I I S H A

「誕生日なんていらぬ。」とずっと思っていました。

私には、本当の父親がいません。私が物心ついた時には、もういませんでした。まだ、私はすごく小さくて、母も夜中まで帰って来ぬい日が多く、日中に家に居ても、ずっと寝ているし、ご飯も作ってもらえない日もあって、私は姉と曾祖母の家で生活していました。

だけど、曾祖母も幼い私に気がつくくらいつめたく、姉は仲良く出来ているのにどうして母と曾祖母は私をこんなに嫌っているのだろうと、居場所をなくしました。

私は、幼い頃だったのに悩んで悩んで、居場所もなくしたことで苦しい中、肺炎になってしまい、曾祖母は、児童相談所に連絡をしてくれて、私は意識をなくしている間に病院にいましたが、児童相談所の担当の先生が居ただけで曾祖母の姿はありませんでした。姉は学校帰りに話を聞いて来たいのですが、すぐ帰ってしまいました。そしてその時、一番来てほしかった母は入院中、一度も来てくれることはありませんでした。

今、考えると、幼い頃、私は自分の誕生日すら分かっていなかったと思います。それは、母と関わる時間が少なかったからです。

曾祖母の家で暮した後は、母が今の義父と結婚していたことは姉は知っていたけど、やっぱり私は知らなくて、曾祖母に、そろそろパパが着く頃といわれ私は自分の本当のお父さんがむかえに来たてくれたと思っていたけど、それは、私の考えがあまり良かっただけで、むかえに来たのは義父でした。車を見ても顔を見ても誰かまったく分からない人で、姉はパパだよって平気で言っていたけど人見知りの私はあまり心を開けずにいて、いつも一人で部屋でテレビゲームをしたり、ずっと義父と母をさけていました。

そうしているうちに姉と私は、義父の祖母の家に行くことになり、そのまま、義父の祖母の家で姉と一緒に四人で暮らすことになりました。義父の実家でも、姉は仲良く出来ているのに、私はいつも、「あんたはパパの子じゃないんだからね。」とか「何でお姉ちゃんが良い子なのにあんたは出来が悪いの？本当迷惑かけないで。」と何回も何回も毎日言われ続けました。言われ続けるのが嫌で、家に居ることが怖くなってしまい、外で朝から夕方まで、ごはんの時間以外は近くの道を散歩したり、小さい公園で時間をつぶしてすごしていました。

義父の祖父は、助けてくれることは一度もなく、近くにあるリモコンや、箱ティッシュなどいろいろな物を投げつけて来ました。そして、全然関係のない人に怒っていても、私のことを怒鳴って来たり、余計に家に居ることが嫌になり、私の居場所はこの家にもなく、誕生日どころではありませんでした。

義父の実家に、たまに母や、義父が戻って来ることがありましたが、イライラしている様子で、いつも怒って帰って来たり、私は関係がないのに、夜中に、裏山の所へ置きざりにされて、「全部あんたのせい。」と言われることもありました。一番最悪な時は、変な男の人達が義父の事を探しに来た時に、居ないとウソをつき、男の人達が帰ったあと、必ず、私が八つ当たりされ、なぐる、けるの暴力はもちろんのことで血だらけでもやめてくれず、泣けばもつとひどくなり、幼稚園の先生に言えば、もつともつとひどくなり、泣くことも、助けを求めるということも出来なくなっていて、みんなの顔を見ることも怖くて、いつもビクビクしながら生活していました。

そういう生活をしているうちに、どんどん「死にたい。」という気持ち湧き、ご飯を食べることが出来なくなり、「怒られたくない。」と言う気持ちで、一口頑張って食べても吐いてしまい、結局「怒られたくない。」と思っていたのに結果、心配されるどころか、怒られてしまい、気がついたら、笑顔が消えてしまい、笑うことすら出来なくなってしまうていました。そうして、義父と母がまたいなくなつた後、義父の祖父が病気で祖母が姉と私の面倒を見ることが出来なくなつたため、一時保護所にあずけられることになり、その後、施設に入り、初めて小学校一年生の時に誕生日会をしてもらい、そこで、今まで気にしていなかった誕生日を気にするようになりました。

小学校二年生の時に家に戻りましたが、弟がご飯をふざけて食べたたり残したりすると、必ず、「お

前が悪い。「弟はお前をまねするから、ねろ。」私は全然何もしていないのに、怒られて、誕生日の日も、「お前、じゃまだからここに居るな。ねろ。」そういう風に言われてしまうことになってしまい、その後、施設に入っても、私は誕生日の日を周りに言うことができなくなっていました。

中学に入ってから、もう誕生日が大嫌いになっっていました。いろんな人たちに「誕生日いつなの?」「もう少しだね。『おめでとう』と言われるのも全く嬉しくないし、私としては、「何が『おめでとう』なの?どこが?」私は、ずっとそう思っていて、高校に入ってから、周りの人たちに「おめでとう。」と言われることが、すごく嫌で、「おめでとう。」と言われるたびに苦しくて、営業スマイルで上辺だけの「ありがどう」と私は、今年の誕生日の日まで続けていました。

だって、誕生日の日は、両親からの「産まれて来てくれて、ありがどう。」ということをよく教えられていましたが、私はそれだけではなく、両親に、「私のことを産んでくれて感謝してるよ。ありがどう。」と言う日でもあると思っているからです。私は、正直どちらもありません。一回だけ、母の仕事場の仲の良い人が、私たちの誕生日会を開いてくれて、プレゼントも全員分買って来てくれて、ケーキも用意してくれました。

だけど、私の誕生日を弟と姉は知らないのです、必ず、沈黙が流れて、運が悪く私の誕生日と、母と義父の結婚記念日の日が一緒なので、母は、「ままとパパのお祝いだよ。」というので、二人でローソクを消すのかと思えば消さないから、弟と妹に

消していいよと言って消してもらおうということがありました。その後に、義父が捨てゼリフで「だからこんなやつのためにこんなのをやる必要ないっていったら。こんなやつ誕生日会なんてやる必要がねんだよ。」と言われ、おめでとうの一言もなく、母も同様おめでとうなんて絶対に言いませんでした。

そもそも、本当の父親に言われることもないし、母には幼い時から暴力を振るわれ続けているし、家に居ても、口をきかず、ただじゃま者あつかいをされるだけなので、「産んでくれてありがどう。」など、言う気もないし、言えないし、私は、何のために産まれて来たんだろうと、ずっと「死にたい。」と誕生日の日は必ず、思っていました。

今年の誕生日も、正直、前の日からずっと嫌で、わざと誕生日を言わないようにしていたけど、先生たちが、全員と喋っていいほど、「おめでとう。」と言って来てくれて、最初は正直、心底嫌だなと思っていました。

だけど、私は、逆の立場になって考えてみました。

私が、友達や、誰かに誕生日おめでとうと言っている時、私の家族ではないし、血がつながっていないけど、おめでとうと言っていると思えました。

私のその時の気持ちを考えると、私は、友達や、私と関わってくれる人たちがいてくれて、楽しいし、出会えてすごく嬉しいから、相手が産まれて来てくれたから、楽しいと思えることも増えていて、私の周りの人が支えてくれてると思うと、家族でも、血がつながっているわけではないけど、

産まれて来てくれて、今、出会えていること、支えていてくれること、楽しいと思えることすべて合わせて、産まれて来てくれてありがどう、「お誕生日、おめでとう。」と言っていると、思いました。相手が私みたいに、嬉しくない、どこがおめでとうなのと言われたら哀しいなと思いましたが。

だから、これから先、誕生日が来て、みんなに、「おめでとう。」と言われたら、次こそは素直に心から「ありがどう。」と言いたいです。

両親がすべてではないし、「おめでとう。」の言葉には、いろいろな意味が入っていると思うからです。その人、その人との関わりがあるからこそ大切な「おめでとう。」だと思えます。

これからは、心から「ありがどう。」と言い、心から「おめでとう。」と相手に伝えて、素直に嬉しいと思えるようにして、大切な日にしたいと思います。



【選評】—作文—

東北アララギ会「群山」編集委員

日本歌人クラブ会員

宮城県芸術協会会員

川田 永子

前回迄は、課題文、自由文、読書感想文の三分野の募集でしたが、今回は「作文」としての募集だけにとどまりました。此の作文への応募数は九編ですが、いずれも懸命に書かれた様子が解る文章でした。幾度か読み返し勘案の結果、規定の賞を次の様に紹介します。

金賞—「輪」—暗闇と光—

銅賞—「セロひきのゴーシュ」—

盛岡少年院 S・R

筋道の良く理解出来る文面です。人生の明暗を思考する眼差しの深さが滲んでいます。

主人公の説明をしながら、自分の気持ちを当て嵌めて考え、人の役に立つ人間になりたいと言う結論がしっかりとしています。

青葉女子学園 ボブ

佳作—「雪渡り」—を読んで

盛岡少年院 K・K

幼少の頃に父親から受けた暴力が原因で、陰気な性格になり、大人を信用出来なくなつたと言う経緯が良く表現されています。信用

読書を通しての人生観を、客観的に表現されていて、内省の気持ちが良い伝わります。

東北少年院 H・R

佳作—大人達へ「ごめんなさい」—

東北少年院 E・M

義父からの暴力が原点で、大人への不信感に悩むが、優しい先生方に出会って改心を志す迄の経緯が、

細やかに表現されています。

佳作—「大嫌いだった誕生日」—

青葉女子学園 M I I S H A

幼少の頃からの厳しかった環境での生い立ちが、よく判るように順序立てて書いてあります。そして、誕生日の意味する事は何か等と考へ、今後は懸命に頑張つて日々を素直に明るく過ごしたいと、その前向きな姿勢が見えるようです。

尚、東北少年院のK・Sさんの「人間の価値」や、青葉女子学園の牧場のお姉さんの、「いつも思っていること、反省と謝罪」と題する作文等も、それぞれの深い意味が込められていて印象に残りました。

《詩苑》

金賞

大好きで大切な先生

青葉女子学園
M I I S H A

ウンだよ・・・
信じたくない 信じられない・・・
どうしてなんだろう・・・
どうしてなの？

私は 初めて大人を好きと思えた
それは 青葉で出会って
五分 十分 そんなにかかってない
それなのに この先生は信頼出来る
大人を信じてもいい
そう教えてもらえた気がした

「一緒に約一年間頑張ろうね。」
そう言われた時 私は
「はい。」と答えた
それが初めて話した会話だった
嬉しかった すごく嬉しかった

それから青葉で生活していくうちに
注意も優しくいていねいに
出来るコトが増えたら
自分のコトみたいに喜んでくれて
すごく すごく ほめてくれたの
そんな優しい先生が どんどん
どんどん大好きになっていった

私が具合悪いトキは
人一倍心配してくれて
生活を頑張るためなら
いそがしくても 必ず
面接をしに来てくれた

担任の先生とケンカをした時は
いつも 必ず
どちらかが悪いわけじゃない
どっちにも悪い部分があったって
言いたいコトを 全部わかってくれた
そんな優しい先生が大好きで
大好きで 大切な先生になっていた

先生がいてくれたことで

青葉に来たばかりのところより

私は出来るコトがふえたの

「日課なんて出たくない。」

「教科勉強なんてつまんないし。」

「ねてるほうが楽だしねむいからねる。」

そう考えて日課に出なかった私が

先生と話して 目標を決めて やってみた

やってみたら授業に出られるようになって

出来た私を先生は いっぱい

いっぱいほめてくれたのが嬉しかった

朝は起きられるようになって

日課も授業も出られるようになってたの

「寮生とかかわりたくない。」

そう思ったけど 寮生とも仲良くできて

仲良く出来たから日課もより楽しくなった

そんな中 嫌な予感がした

私の大好きで大切な先生との面接

いっぱい話した中で

私は泣いてしまった

まだ何も言われてないのに・・・

すごく哀しくなった

先生がいなかったらと思うと怖くて

それが最後の面接だった

大きく分けて

二つの約束をした

“自分でやったことの責任を取ること”

“良い意味で青葉を出てから居場所だったって思えるよう

に”

この二つだった だけど

約束 守れてなかったって気がついた

先生が居なくなっちゃって

怖くなって 心を閉じちゃった

辛くて 苦しくて 日課も出られなくて

「出会いは別れだ」とか「大丈夫だよ」

そんな言葉なんてどうでもよかった

だったら今すぐ戻してよって思った

責任もとれなくてダメだって思った

周りの先生がすごく心配してくれて

まだ 私のことを心配してくれる先生が

いっぱいいるんだって気づいた

大好きな先生のこと思い出して

今 私青葉は良い場所って心から思ってる

ずっと逃げてただけだった

怖くて 辛くて 苦しくて

弱い自分を見せたくなくて 心を閉じてた

銀賞

約束を守ってないことに気がついて
すぐ後悔した。でも気づいたとき
いくら遠くにいても

私が先生を想ってるかぎり

私の中から先生は絶対いなくならない

もしいなくなったら 私のはなれてるだけ

そうだよ 大好きで 大切なの だから

私の心の中からはなれることなんてないの



天を翔ける竜のように

盛岡少年院 Y・S

雨の中泥沼でもがく自分がいて。

どんなに頑張っても抜け出せなくて。

コンコン、コンコンという音がして。

ふと見るとガラスにうつる自分がいて。

ガラスの中の自分の頬をツーンと一筋の水が流れて。

雨かなと思ひ、頬にふれると、涙だと気づいた。私は泣いて

いたのだ。

私はそんな自分を見るのが辛くて、目を閉じた。

周りの声を聞くのが怖くて耳をふさいだ。

そしてもがくのもやめた。

後は、気付かないうちに沈むだけだった。

泥沼の中は暗く、ぼやける視界と、水の中のようなゴクゴク

したおとの世界だった。

そんな世界で生きる事なんかできないのに私は抜け出す方

法を知らず、じっとそこでうずくまっていた。

私の今までの人生は、白い壁に白いペンキをぶちまけている

ような、味気のない人生だった。

私は、絶望し、諦念した。

しかし太陽のような明るい声が聞こえて、目をあけて見ると、

桜のような優しい笑顔と月のような静かな瞳で私の横にいる

あなたがいた。

銅賞

溶接は友達

東北少年院 S・Y

私は初めて気づいた。あなたがずっとそこにいてくれた事に。他にも、ゴツゴツとした岩のような手で支えてくれる人。大きな樹のような背中で、導いてくれる人達がいた。ここは泥沼なんかじゃなかった。私が居た所は宇宙にも負けない無限大の世界だった。そして私は心に決めた。天を翔ける竜のように、空を彩る事ができる、真の美しい人間になろうと。



溶接は、時に自分の心の状態を映す鏡にもなる
イライラしていれば幅が不揃いになり、気持ち沈んでい
ばなかなか溶けない
そんな時は、焦らず落ちついて深呼吸をしてみる 気持ち
静めてもう一度溶接をしてみると、さっきよりも上達してい
ることがよくある そんな溶接が僕は好きだ
日を重ねるごとに、技術の上達が目に見えてわかるし、その
日その日で毎日違った顔を見ることが出来る その顔を見て
今日は体調が良くないのかな
何か嫌なことがあったのかな
と、まるで人間のことのよう想像してしまう
僕にとって溶接は友達のような存在であり、これからも一生
付き合っていこうと思う

佳作

「ありがとう」

盛岡少年院 S・K

今まで言えなかった「ありがとう」
捕まってから
家族が面会に来ても
言えなかったその一言
当たり前だと思っていたからか
忘れていたその一言
離れて初めて気付いた
家族の温かさ
家族の大事さ
気付いたからにはしっかり伝えたい
後悔しない内に伝えたい
「今まで育ててくれてありがとう」
「見捨てないで信じて待っていてくれてありがとう」
そして
「産んでくれてありがとう」と

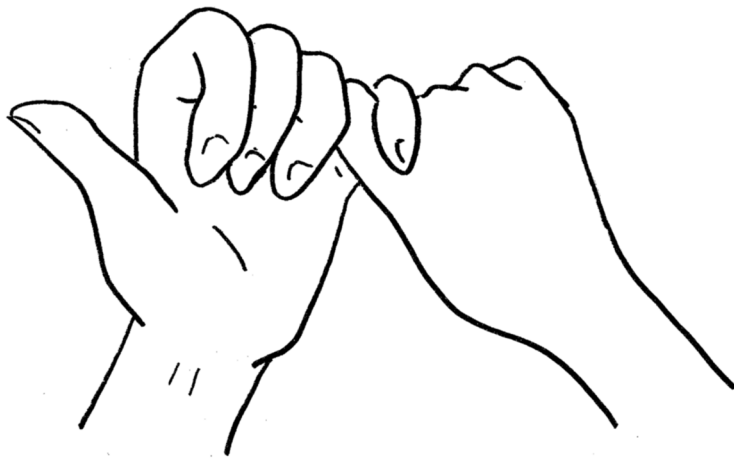
佳作

「反抗」

盛岡少年院 M・K

「絶対」なんてものは「絶対じゃない」ということがもう既に
「絶対」であるように
「永遠」なんてものが「永遠にこない」という時間が「永遠」
に流れているように
何をやっても「自信が持てない」ということに
「自信を持ち」
まだ「生きたい」と思いながら「死んでいく」人がいて
もう「死にたい」と思いながら「生きている」ひとがいるこ
の現実
世界は矛盾で出来ているだろう
自分も犯罪を「しない」ということを「してこなかった」
そうやって反抗しながら生きてきた
だから矛盾にも反抗しようと思う
絶対に同じ過ちは永遠に繰り返さずに、ちゃんと自信を持っ
てしっかり生き抜こうと思う
そうやって矛盾にも反抗しようと思う

今までなんど嘘をついて来ただろう
変わると言って変わらなかった
泣かさないと言ってなんども泣かせた
次は真面目にすると行って非行に走った
信用を失っても嘘を言っていた
何度も裏切ってしまったけど嘘しか言えなかった
嘘と一緒に生きてきた
ここにきてわかった嘘は、何一つ良くない
もう過去は変わらない
だからもう嘘をつかずに前に進む
家族・友だち・恋人のために変わってみせる
嘘に負けずに努力する
だから僕を笑顔で待っていて



【選評】—詩—

日本現代詩人会会員

日本文藝家協会会員

宮城県詩人会顧問

原田 勇男

応募作品は九編。金賞はM I I S H Aさんの「大好きで大切な先生」。九八行の長い作品だが、思春期特有の繊細な感情を細やかに表現していて感動した。一年間指導してくれた先生に対する思慕と感謝の気持ちに濃密に書かれている。先生と出会ってから日課をこなした授業にも出られるようになった。先生が交代したショックで一時は以前に逆戻りしたが、先生との約束を思い出し周囲の優しいサポートもあって立ち直った。初々しい佳品だ。

じこもり、味気ない自分に絶望し、諦念していた。しかし、そんな彼に明るい声が聞こえ、優しい笑顔と静かな瞳を向けているあなたがいた。また彼を支え、指導してくれる人びとの存在もあった。それに気づいたとき、彼のいた場所は宇宙のように無限大の世界になった。失意と再生の歌である。

銅賞はS・Yさんの「溶接は友達」。溶接作業の好きな労働賛歌だが、この作品の優れている点は、自分の感情次第で溶接の出来が変化するのを見逃していないことだと思ふ。逆に溶接の機械にも心を配り、友達のように接している。好きな作業との出会いは幸せである。出所後も溶接の仕事に従事できることを心から祈りたい。佳作の三篇はそれぞれ自己中心の暗闇を生きてきたが、それを反省し自信をもって生きて行こうという決意を語っている。



《歌壇》

金賞

この暑さに耐えて体を鍛えつつ自分を変えて仮退院日

盛岡少年院 S・R

銀賞

理美容師まさか自分が目指すとは初めて擱んだ本当の夢

東北少年院 F・T

目が覚めて夢かと安堵過ぎし日の非行の記憶今を苛む

東北少年院 K・R

空見上げ格子の向こう輝いて未だ忘れぬ君と見た月

東北少年院 Y・T

朝起きて冬の寒さに耐えきれず布団出られず夢の世界へ

東北少年院 O・G

友達はいると嬉しい楽しいなそれでもいつか別れはくるよ

東北少年院 K・R

あなたがね求めるならば変われるよだから自分をあきらめるなよ

東北少年院 K・S

早朝の静けさ破るせみの声夏季限定の自然の時計

東北少年院 N・R

オムライス君と作ったあの味は今でもずっと忘れられない

東北少年院 A・T

がんばっててがみをかいた母の日にすなおなきもちつつみかくさず

東北少年院 S・R

佳作

過去の恥思い返せば今の恥消そうとするが過去は消せない

東北少年院

K・R

暑いけど未来のためにコツコツと忍耐力を磨いていこう

東北少年院

T・R

幸せを作りたければ努力をしすぐ怒らずに優しくしよう

東北少年院

H・R

薬物をやらずとわかるおそろしきぼくは絶対手は出さないぞ

東北少年院

T・K

夏の夜花火しようとして土手に行き見上げた空は永遠の思い出

東北少年院

N・S

君とみた沢山の空過去のもの僕にとっては大切な日々

東北少年院

T・K

窓の外いつしか遠い場所になり部屋のかたすみ自己批難する

東北少年院

S・A

腹が出て負けじと始めるダイエット実りの秋に耐える食欲

東北少年院

K・S

被災者は家とか無くて困ってる手助けしたいボランティアで

東北少年院

K・D

あと少し期待と不安胸に抱き夢に向かって一歩踏み出す

東北少年院

K・R



【選評】 — 短歌 —

短歌結社「橄欖」運営委員
宮城県歌人協会「橄欖」宮城支部代表
宮城県芸術協会選考委員兼編集委員
日本歌人クラブ会員

伊藤 久子

【金】この暑さに耐えて体を鍛え
つつ自分を変えて仮退院日

S・R

「評」今年の夏も猛暑日が続きました。この歌の良いところは、自身の欠点を正して「仮退院」の日を迎えようと、前向きに努力しているところ。宮沢賢治の「雨ニモマケズ風ニモマケズ」の精神で頑張ってください。

【銀】理美容師まさか自分が目指すとは初めて掴んだ本当の夢

F・T

「評」今までに掴んだ事の無かった本当の夢は「理美容師」だという事に気が付いた。自身でも分か

らなかつた本当の夢に向かって突き進む、強い意志が感じ取れました。

【銀】目が覚めて夢かと安堵過ぎ
し日の非行の記憶今を苛む

K・R

「評」ああ夢で良かった、良い夢から覚めた時、ほっとしたのですね。自身のかつての非行におびえたのでしょうか。それは良心が有るからです。日々の精進で、心が変わればきっと苛まれなくなるでしょう。

【銀】空見上げ格子の向こう輝いて
未だ忘れぬ君と見た月

Y・T

「評」格子の窓の向こうに輝いているのは月なのですね。以前、君と見た月を重ねた思い出の恋の歌です。満月、半月、三日月などにすればもつと情感が豊かになりましたね。

【銅】「がんばっててがみをかいた母の日に・・・」S・Rさん、素直な気持ちを書いて良かったですね。「朝起きて・・・」のO・Gさんの起きられない様子も楽しいです。

《俳壇》

金賞

春風が吹きはじめたらお別れだ

東北少年院 T・K

銀賞

動くなよ願ひ届かぬ床のセミ

東北少年院 F・T

スイカ見てふと思ひ出す家族の輪

東北少年院 I・R

季語使い俳句作るのむずかしい

青葉女子学園 牧場のお姉さん

銅賞

蟬時雨家族の思ひ出蘇る

東北少年院 K・R

鈴虫の歌声聞いて眠る僕

東北少年院 Y・T

カナブンが投げても飛ばない無人駅

東北少年院 K・R

文字数を指折り数え俳句かな

東北少年院 K・R

風に揺れ涼しさ運ぶ鈴の声

東北少年院 S・H

虫の声夜空にひびくメッセーじ

盛岡少年院 Z・R

外に出よ触れるばかりに夏の月

盛岡少年院 S・R

桜みてこぼれるものは笑顔かな

東北少年院 H・R

スイカはねシャキッと美味しい歯ごたえ

東北少年院 K・R

来年は皆で年を明けたいよ

東北少年院 K・S

すいか割り来年こそはやりたいな

東北少年院 T・K

色恋と儂く咲き散る花火かな

東北少年院 K・M

風運ぶ鈴虫楽団四重奏

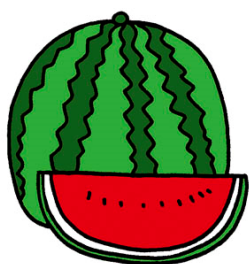
東北少年院 Y・K

天の川そこまで届け願い事

東北少年院 S・A

わたあめをほおばるきみとはなびみる

東北少年院 S・R



【選評】—俳句—

現代俳句協会宮城県支部幹事
宮城県俳句協会常任幹事
宮城県芸術協会委員

鈴木 三山

俳句は世界最短詩と言われます。その詩とは簡単に言えば「間接的に美しいものを表現した文芸作品」であると言えます。

五七五の十七文字で表現するために、俳句にはいくつか決まりごとがあります。季語と切字そして定型です。もちろんこれらの制約を外した俳句作品もありますが、基本的な俳句の作り方として学ぶべきでしょう。

入賞作品について鑑賞していきます。春風が吹きはじめたらお別れだ

東北少年院 T・K

春は別れと出会いの季節です。卒業や入学あるいは社会人なら人

事異動による転勤などがあることでしょう。そこには春を迎える喜びとともに寂しさもあるのです。動くなよ願ひ届かぬ床のセミ

東北少年院 F・T

一人で部屋で退屈しているところへセミがやって来たのでしよう。しばらくくじつとして楽しませてくれとの願いも空しく、手を触れようとした瞬間床から飛び去ってしまったのです。セミの去った後には夏の暑さが残ったことでしょう。

スイカ見てふと思ひ出す家族の輪

東北少年院 I・R

今年も暑い夏がやって来て、大きなスイカが店先に並ぶようになりしました。途端に昔は家族そろっ

てスイカを食べたことを思い出したのでしよう。みんなと一緒に食べてこそおいしさが何倍にも感じられるのですね。

季語使い俳句作るのむずかしい

青葉女子学園 牧場のお姉さん

俳句では季節を感じるものが大切な要素の一つです。季語とは日本人が昔から培ってきた季節を表す言葉のことを指します。季語は歳時記というものにまとめられています。人の関わる自然や行事などあらゆる言葉が集約されていきます。国語辞典に載っていない言葉もありますので是非一冊お持ち下さい。

《柳壇》

金賞

文房具使い切るのは初めてだ

盛岡少年院 H・I

銀賞

待ってるねその一言でホッとす

盛岡少年院 T・R

昨日より今日が好きだと明日も言う

東北少年院 F・T

しわのかずとしをとったなははのかお

東北少年院 S・R

銅賞

汗流し齒をくいしばり生きてやる

盛岡少年院 H・K

弟と今年の夏は遊べない

盛岡少年院 H・K

踏んばって明るい未来に歩み出す

東北少年院 T・R

朝起きて一番に聞く鳥の声

東北少年院 N・S

一人ではないと教えてくれた人

東北少年院 T・K

お父さんいつもあこがれありがとう

盛岡少年院 S・R

たくさんの支援があつて今がある

東北少年院 Y・T

なくさせた母の気持ちを取り戻す

東北少年院 O・G

寝る時にいつも自分は考える

東北少年院 K・R

涙腺が自然と緩む暖かさ

東北少年院 T・S

お互いに感動与え感謝され

東北少年院 S・Y

鉛筆は使うとすぐに丸くなる

東北少年院 E・T

初詣家族みんなで願い事

東北少年院 A・T

積み重ね小さな事こそ丁寧に

東北少年院 S・A

遠い中私を思い会いに来た

青葉女子学園 牧場のお姉さん

【選評】—川柳—

川柳宮城野社同人
宮城県芸術協会会員

佐藤 岩男

今年は、三十九名の方から六十九句の作品をいただきました。現在の自分の生活を省み、両親や兄弟・親友等との思い出を通して、周りの人々への感謝の気持ちを詠んだ句が目につきました。また、自分を今まで育ててくれた肉親の愛や、ふるさとの自然の優しさに改めて気付き、自らの生き方や考え方の変化（成長）を詠んだ句も多かったです。

川柳は、紙と鉛筆とそして心があれば、誰にでも作られる十七音の詩です。難しい言葉はいりません。いつも使っている言葉で表現すればいいのです。

十七音の詩には「俳句」もありますが、俳句は周りの風景を句の中心にして詠み、川柳は人間を詠むこと

に重心を置くといわれております。例えば電車に乗ったとき、車窓から眺める風景を詠めば「俳句」になるし、車内の乗客の様子を詠めば川柳になると言われております。しかし、最近では川柳と俳句の間の垣根が低くなってきたような気がします。

川柳は、五音・七音・五音の短い詩といわれますが、書くときも詠むときも、五・七・五で区切る必要はありません。一行に続けて書いてください



《 絵 画 》

金 賞



『春』

盛岡少年院 H・K

【選評】 雪を残す雄大な岩手山、ナノハナを思わせる黄色い草原、春の空気が見事に描き表されている。

※表紙掲載作品

銀 賞



「シクラメンのある窓辺～休憩終了～」

東北少年院 K・R

選評 灰色の壁を境に、外と内の風景がカーテンの揺らぎで結びついている。見事な描写演出である。

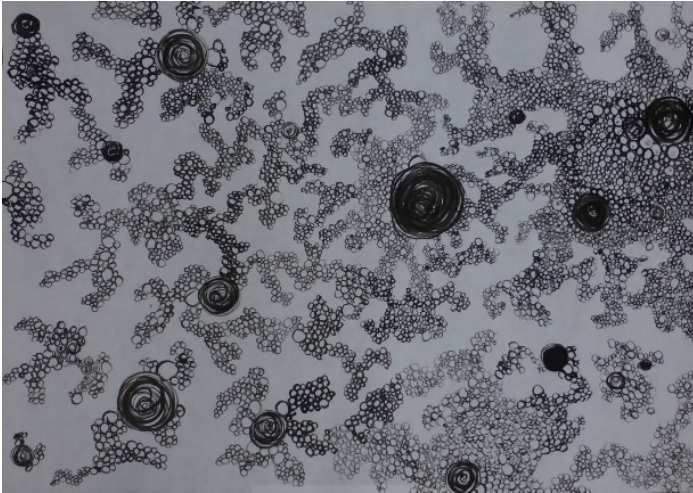
「成長」

青葉女子学園 な

選評 曼珠沙華、ヒガンバナ、キツネノハナビと様々な名前をもつ秋を象徴する野の花を、伸びやかに描かれている。



銅 賞



「めぐ離あい」

東北少年院 F・T

選評 気泡が細胞なのか、タイトルから緻密に描写された「つぶ」の動きが様々に想像される作品である。

「ゆうぐれをイメージした岩手山」

盛岡少年院 S・K

選評 寒さ厳しい岩手山、その表情を色面分割的に表現した工夫ある作品である。

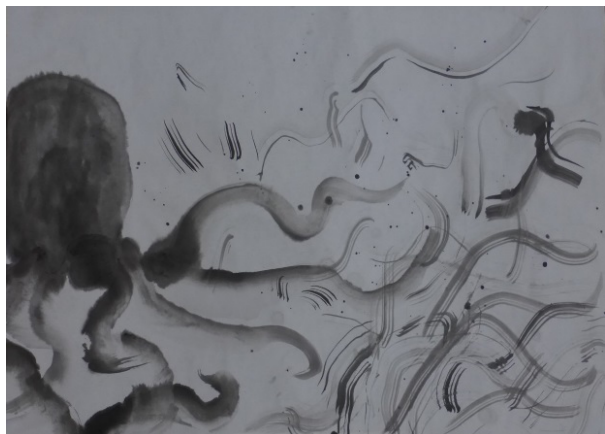


「シクラメンのある窓辺 MOON ROAD」

東北少年院 F・Y

選評 筆致の大胆さとは反対に色調が夜の静けさをしっかりと表現している作品である。

佳 作



「生命力」
青葉女子学園 や

「シクラメンのある窓辺 和の國」
東北少年院 K・M



「雪どけ岩手山」
盛岡少年院 H・K



「世界の菊 明るい元気な菊」
盛岡少年院 S・R



「葛藤」
東北少年院 S・Y

《 ポスター・カレンダー 》

金 賞



「運動会」

盛岡少年院 F・K

選評 スッキリとまとめられた画面。レタリングされた文字、走る飛ぶ感じがよくできています。

銀 賞



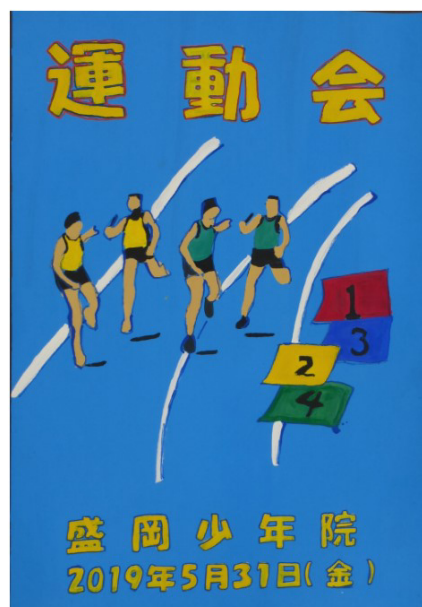
「Just for Today」
東北少年院 F・T
選評 テーマを表わす図柄が良い。
「未来は」の文字に色彩とレタリングが欲しいです。

銅 賞



「薬 金 性」
東北少年院 K・D
選評 レタリングされた文字が良い。空ろな人物が悲しい。金・薬・性の文字を大きくすると良くなります。

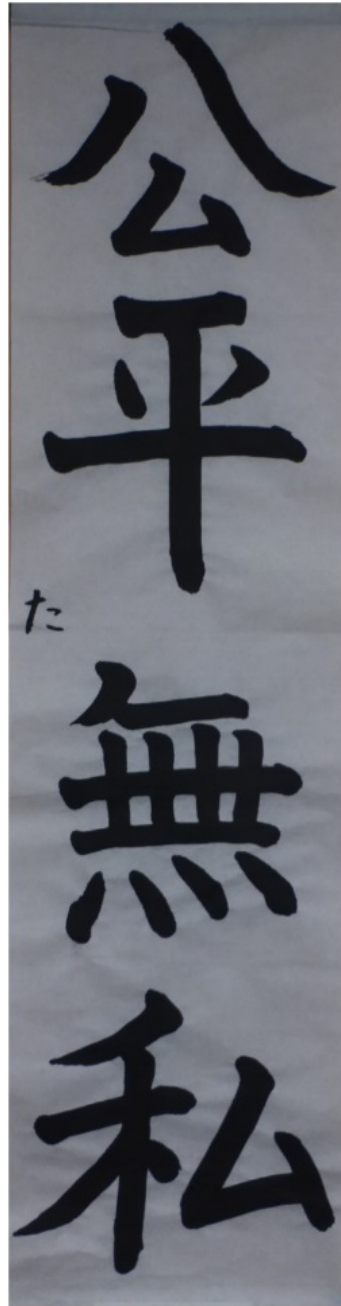
佳 作



「運動会」
盛岡少年院 S・Y
選評 運動会とすぐわかる図柄が良い。文字をきちんとレタリングして欲しいです。

《 毛 筆 》

金 賞

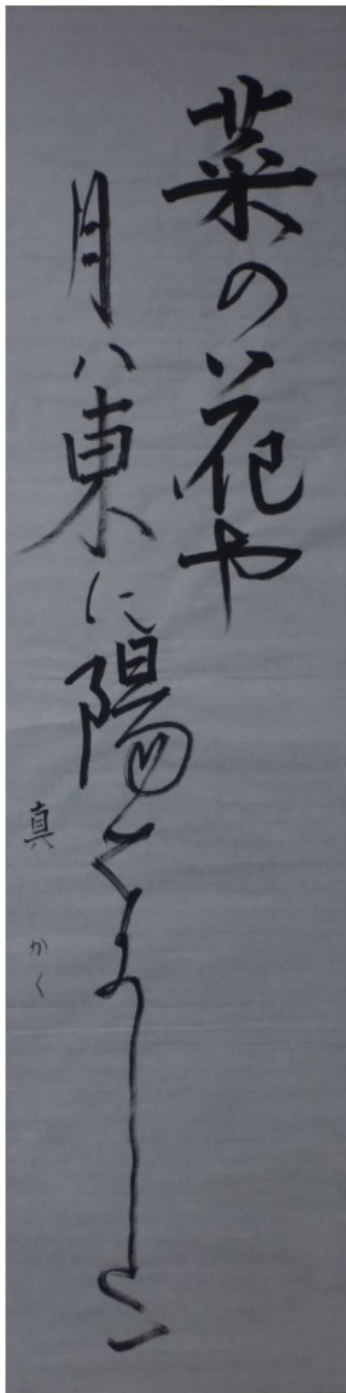


「公平無私」

青葉女子学園 た

選評 用筆確実で字形も秀麗。完成度高い。

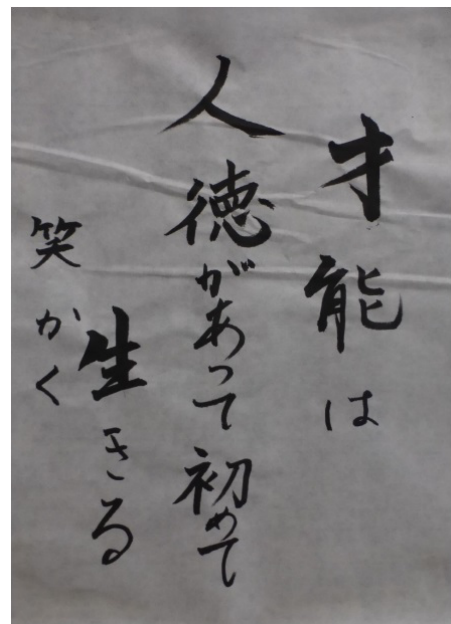
銀 賞



「菜の花や」

東北少年院 真

選評 書線の流れ美しく、墨色の変化も良好。

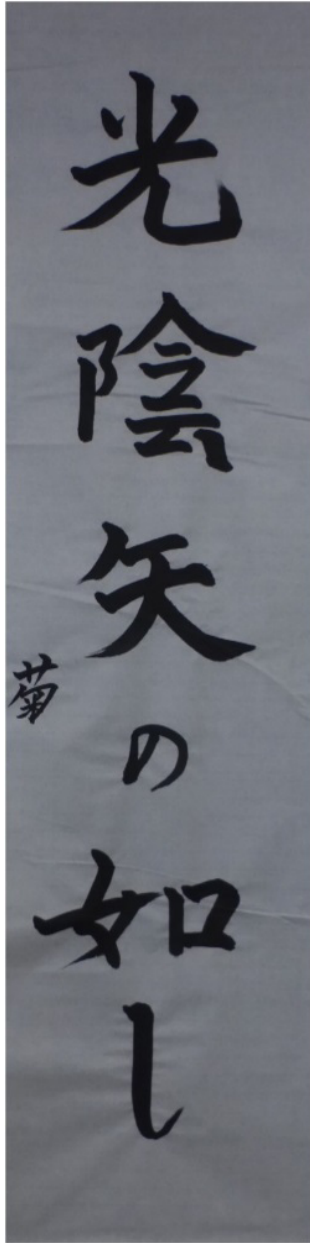


「才能は人徳があつて初めて生きる」

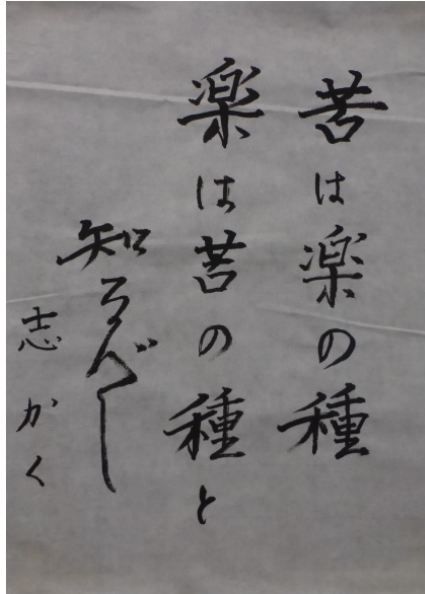
東北少年院 笑

選評 字粒に変化をつけて、作品の効果を高めている。

銅 賞

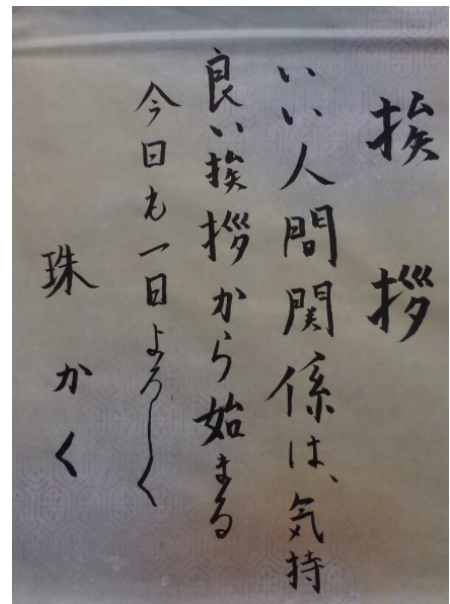


「光陰矢の如し」
東北少年院 菊
選評 行の中心を
通してすっきりと明るく書
いた書

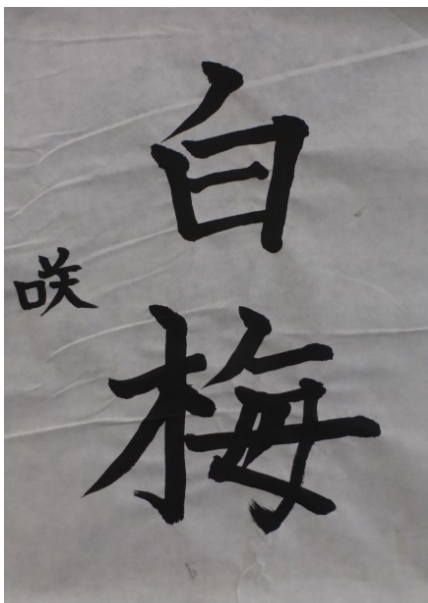


「苦は楽の種」
東北少年院 志
選評 二行を対比さ
せた構成が見易
くおもしろい。

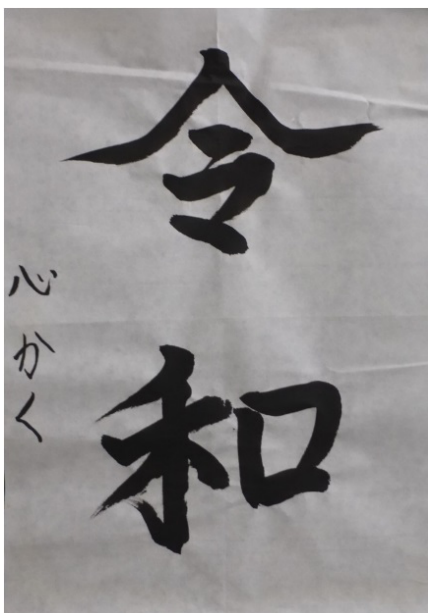
「挨拶」
東北少年院 珠
選評 料紙の効果を
利かせて美しく
まとめている。



佳 作



「白梅」
東北少年院 咲



「令和」
東北少年院 心



「未来永劫」
青葉女子学園 た

《 硬 筆 》

金 賞

星からきたひと

立原 えりか

それが、いくつするときだったか、
少女はおぼえていません。とても幼
かった日のいつか、でも、その日の
できごとは、くっきりとおもいだす
ことができるのです。

「星からきたひと」

青葉女子学園 T. C

選評 優しい字形でペンを使い失敗なく書き
通し、見事。

銀 賞

雨にも負けず
風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ
丈夫なからだをもち
慾はなく 決して嘆らず
いつも静かに笑っている。

宮沢 賢治

「雨にも負けず」

盛岡少年院 H・I

選評 字粒整い安定した書きぶりは終始一貫している。

銅 賞

「声の力」

東北少年院 I・R

選評 点画確実、慎重さを感じ
取れ好感度高い。

声の力
声には、気持ちが見える
声には、人を引き寄せる力がある
声には、コミュニケーションを作る力がある
ある
声にはみんなを元気づける力がある
声には、人と人をつなぐ力がある

佳 作

くまさん	はるが	めぐ	くまさん	さい	ええと
	きて	さめて	ぼんやり	ているのは	ぼくは
まど・みちお			かんがえた	たんぽぽだ	だれだっけ

「くまさん」
青葉女子学園 T. C

雨にも負けず	宮澤賢治	雨にも負けず	雪にも夏の暑さにもまけぬ	丈夫なからだをもち	怒はなく決して瞋らず	いつも静かに笑っている
--------	------	--------	--------------	-----------	------------	-------------

「雨にも負けず」
盛岡少年院 S・K

雨ニモマケズ	宮澤賢治	雨にも負けず	雪にも夏の暑さにもまけぬ	丈夫なからだをもち	怒はなく決して瞋らず	いつも静かに笑っている
--------	------	--------	--------------	-----------	------------	-------------

「雨にも負けず」
盛岡少年院 S・A

書画部門審査総評

【絵画】

例年に比べ作品数は少ないが、一点一点が充実した内容となつている。作家自身の心のあり様や、空気感を表すための工夫がなされた作品が多くあつたことが印象に残つた。

宮城県芸術協会執行理事

吉田利弘

【ポスター・カレンダー】

テーマが良く伝わる画面であること、遠くからでも多くの人の目にふれる要素があることなど、ポスターに求められる要素がある程度満たされているものを賞に決めました。

宮城県芸術協会運営委員

鈴木智枝

【毛筆】

半切や半紙も多字数の作品が多く、難易度の高さを想像できるが、どの作品も細部に意を配り、錬度高が高かつた。

東北書道会副会長

村山柳雅

【硬筆】

丁寧、確実、慎重といった意識を感じとれる作品がとても多く、個々の完成度を追及する努力をかい間見れて大変良かった。

東北書道会副会長

村山柳雅